

特 249

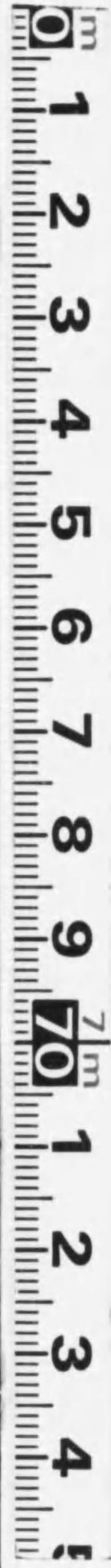
鑛山講話

第十八冊

362

鑛業戰線の勇士

社団法人日本鑛山協會



始





特249  
362

午後3時30分  
 午後3時10分  
 午後3時11分  
 刻々死の途へ行来  
 耳が痛く鼻を流す事  
 午後3時25分  
 息遣子別紙か近いて来た  
 於79、ト、死19、3、7、1  
 午後3時39分  
 大喘呼吸困難ニ付事  
 救護ヲ断念スル事  
 死ニ至リテ其ノ時

故荒川光雄君遺書ノ一部



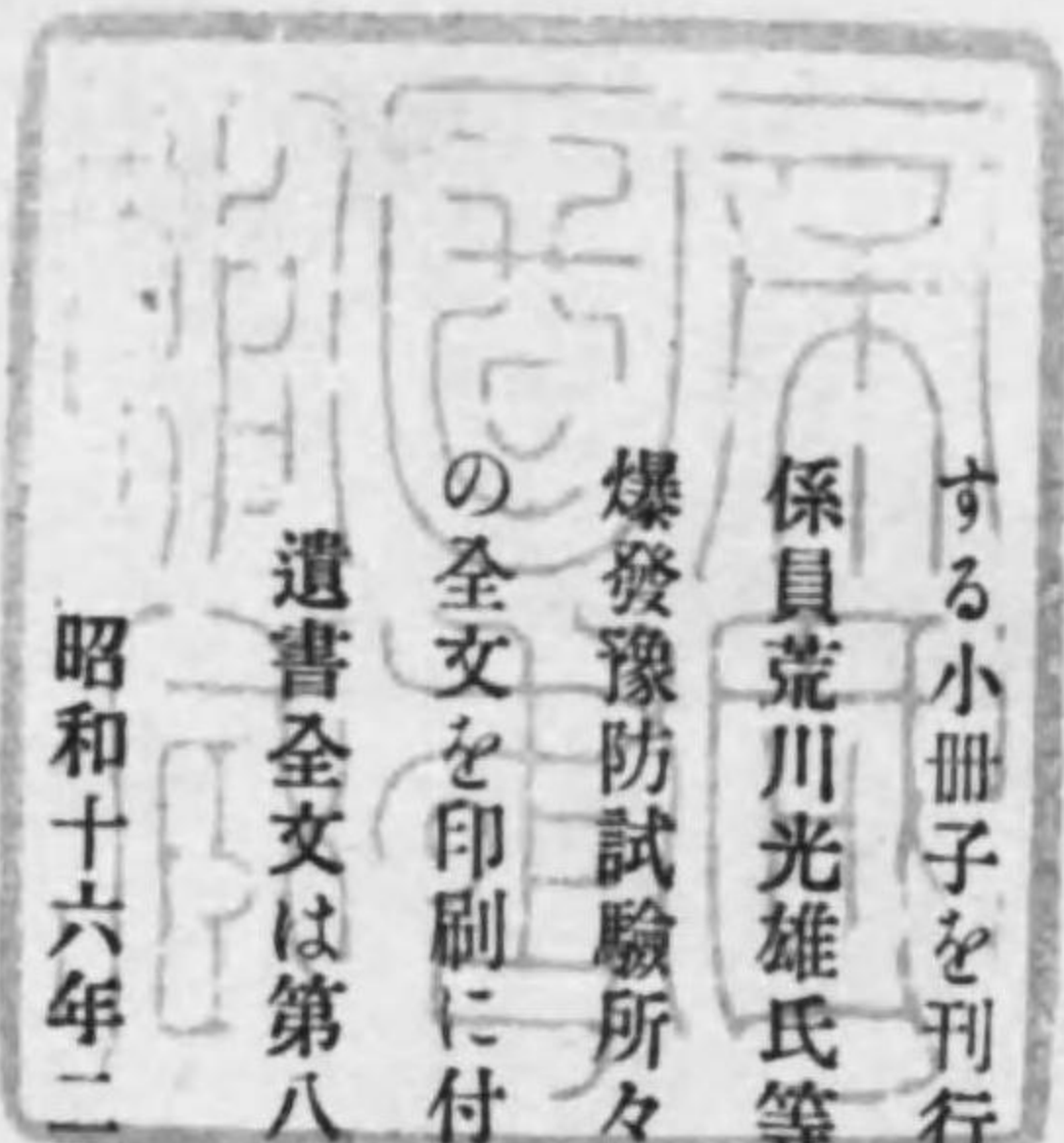
はしがき

發行所寄贈本

本協會は曩に「日本精神の權化、鑛山魂の具現、殉職者の遺書」と題する小冊子を刊行して、昭和十五年九月四日池野炭礦に於て殉職したる係員荒川光雄氏等五氏の遺書を公表したり。然るに之に關し直方石炭坑爆發豫防試験所々長中西信氏より感想文を寄せられたるを以て、茲にその全文を印刷に付し、鑛山講話第八十一冊として發刊す。

遺書全文は第八十冊に記載せるを以て参照せられんことを希ふ。

昭和十六年二月一日





## 鑛業戦線の勇士

蘇 芳 山 人

石油は國家の血である、石炭は國家の肉である、鐵は國家の骨である。と形からは云ひ度いのであるが、實際は石炭は血である。石炭があつて石油も出来る、鐵も出来るのである。その石炭増産の戦線に日夜身命を賭して戦つてゐる産業戦士、然かも幾多の災害が常に我々戦士を襲はうとしてゐるのである。石炭産出の重要任務を完遂するためには、常に此災害と戦つて之に打ち勝つて行かねばならない。故に災害の防止に就いては炭坑經營者の係員も勞務員も力を協せて苦勞してゐるのである。設備をよくし、保安に努め、規定を守り、技術を活用し、そして炭坑の保



安は日一日と高められて行く。それにも拘らず天然の力は時に人智の及ばぬ所を衝き、不時の災害を見るに至るのである。

茲に述べるところは、一鑛業部隊長が死に至る迄その職を完ふして奮闘した物語である。

昭和十五年九月四日長崎縣池野炭礦新坑の坑内、坑口から約九十米の箇所から突如大出水を起し、遂に荒川係員外四名が名譽の殉職を遂げたのであつた。

同坑の人道卸（連卸）は坑口から約九十米の箇所で矢峰舊坑片磐坑道と交叉して居り、古くからコンクリート・アーチで巻いてあつた。例年になく今年の雨量は附近一體の大増水を招き、相浦川も稀有の増水を見た。従つて矢峰舊坑の溜水も著しく水頭を昂め、其の水壓は遂に交叉部のコンクリート・アーチ卷磐壁を噴き破つて、毎分約四百立方呎の水は

滔々と坑内に奔流した。それは九月四日午後十一時頃であつた。

坑内保安係員荒川光雄技師は、當日午後九時頃坑口から五百八十米の坑内詰所で、機械係員から、「中段ポンプ修理のため坑底ポンプも共に一時運轉を中止したため、坑底には或る程度の溜水が出来るだらう」と云ふ報告を聞いた。その後間もなく坑内詰所から約二百九十二米本卸坑底附近を巡視中に、同所の作業員から既に一部の溜水のあるのを聞いて、ポンプの修理中だからいくら水が溜るが間もなく揚水されるから其儘作業を續けるやうに傳へ、西第二幹線坑道皆勤拂（坑口から一五・一七米）を巡視し、その拂でチェンコンベア移轉中の採炭夫田島兼松、飯山長二、仲尾春雄、園田三男の四名の作業を監督してゐた。

一方機械保安係員はポンプ座に於て、約三十分でポンプ修理を終へ、中段と坑底の兩ポンプの運轉を開始させたが、中段パツクへ流れ込む水



が意外に多く、益々増水する一方なので、中段ポンプ排水管のワツシヤ  
ー破損による漏水のためと判断して、人道卸排水管に沿つて調べながら  
約百米位計つたところが、水量は益々増加する一方で昇坑も困難となつ  
たから、これは唯事でない非常出水だと直感し、大急で引返し、第一幹  
線作業中の鑛夫を傳令として本卸と五卸方面に夫々「非常出水だから全  
員即刻昇坑」と急報させた。

本卸部では仕繰、掘進等六組、荒川技手以下全員二十名が作業中であ  
つたが、非常急報傳達が、中繼傳令であつたために「坑底溜水につき早  
く昇坑せよ」と傳達されたのであつたが、十五名は無事昇坑した。

然るに荒川技手其他コンベア移轉隊は、チェーン締付中であり、間  
もなく終了する見込であつたし、ポンプ故障による溜水とすれば相當餘  
裕があるから、早く作業を終つて昇坑しやうと、荒川係員は一同を督勵

して作業を終らせた。その間に再び昇坑を促す傳令を受けたが、責任觀  
念が強く作業に熱中してゐた一同は、遂に作業を放棄しないで仕事を完  
了し、試運轉を了へて打揃つて昇坑しやうとしたが時既に遅かつた。五  
名は遂に死に至る迄非常出水と思はず、ポンプの故障と思つてゐたので  
ある。

坑内は本卸坑底は一度水平となり、再び緩傾斜で昇つてゐる。従つて  
坑底へ出る迄は水の状態は不明であつたのだつた。

それに就いて荒川係員は斯う書いてゐる。

午後十一時三十分頃ポンプ止ルトノ報ニ接ス時ニ拂ニ於テチエーンヲ  
連結ナス最中ナリシタメ連結ヲ終ツテ一同揃ツテ捲立ニ向フ、時二十  
一時五十分ナリ捲立ニ出ルト早増水多シ疑念ヲ抱キツツ水ニ入りテ捲  
立ニ行キタルモ早捲立ノ粹裏マデ増水ナシ昇坑見込立タズ引返シテ増



### 産捲揚ニ至ル

茲を園田三男は斯う書いてゐる。

本日午前〇時卅分より

非常の傳令ありしもチエンをしめてからでも間に合はふと思つてチエンをしぼる坑道に下りたる時十五分前捲立に来て見れば水は殆んど身のたけ位来て居た切替坑道の所まで水は来て居た

直ちに涉らうとせしも時既におそく田島仲尾は殆んど向ふまで行きたるも不能の爲引返す

一同ずぶぬれになる昇捲場に休む

たばこがないのは残念、がすまつち用意する 水を時々はかるが見てるまに ふえる 捲揚は危険の爲昇詰にひなんす

嗚呼、僅か十五分の遅れが此惨事を招來したのだつた。又若しポンプ

の故障を豫め聞いてゐなかつたら或は早く昇坑する氣になつたかも知れない。萬事は運命であつた。一同は、すぐに稍高い位置の増産捲揚へ避難したが、水に追はれて遂に一番高い昇へ避難した。

荒川係員は最後迄希望を捨てず、増産捲揚から増産昇詰へ避難の際も救護隊に避難方向を示すために、ズボン、タオル等で標識を残し、一同と共に最後の決意を固め、部下の一人一人に遺書をかゝせ、自分も刻々と迫る死に直面しながら、沈着に最後の状況を詳細に記録し、部下四名と共に遂に従容殉職したのであつた。

増産捲揚に避難した迄は前記の通りであり、之から後のことは荒川係員の遺書に明かである。即ち、

九月五日午前〇時十五分

増水早くシテ午前二時四十五分ニ捲揚ヨリ昇へ移動ス一同静ナリ



コノ様ナル場合ハ係員カ又ハポンプ方ガ各人ニ連絡ヲ取ラネバナラナ  
カツタト思フ

責任のあるものが警報の傳達を行ふの必要を陳べてゐるのである。命  
令通報の傳達と云ふものが大切なることを強調してゐる。

午前三時十分 捲場へ増水シ始ム

刻々増水ヲナス捲場ノ1-3ハ水面下トナル

午前四時十捲場ノ4-5ハ水面下トナル

午前四時三十分捲場ハ全面水面下トナル

午前五時増水激シ

午前五時四十五分拂ノ1-3ハ水面下ト思フ詰マデ四十四枠アリ

午前六時七 刻々ト危険ニオチイリツツアリ

救護ノ速カナル様祈ル 後二時間餘リノ生命タ

嗚呼變災惹起後約六時間半、漸く危険の身に迫るのを覺へて來たので  
ある。増水の割合から見て此儘増すとすれば二時間で眞の危険が來るこ  
とを豫知したのである。一同の心境はどうであつたらうか。

茲に園田三男の遺書の殘を掲げる。

午前六時

水は刻一刻増して來る

急援隊は未だ來らず

我等五名は既に覺悟す

萬一の場合はいさぎよく

自爆せん

胸高鳴る

お父さん さよなら



お母さん さよなら  
もうしまひてす  
今まいと用の意  
チ ン サ  
して居ります

幸福に さよなら

徒らに水におぼれて死せんよりは、いさぎよく自爆しやうとした悲壯な決心、涙なくして讀まれやうか。

再び荒川係員の遺書に移る。

午前六時二十分 危険ニナツテ來タ

救護隊ハドウシテ居ルノダラウカ

荒川光雄 飯山長二 田島兼松 園田三男 中尾春雄

呼吸が段々困難トナツテ來タ

救護隊ハドウシテ居ルノダラウカ

午前八時十分後十五秒トナル

午前八時二十五分何カ合圖ノ様ナ音ガシテイルト園田ハ言フ

救護隊が何とか活動し、今にも水を衝いて現はれて來はしないかと云ふ夢のやうな空頼もして見たのである。しかし、又一方死を覺悟して殉職せむとする人名を明かにした。係員としての責務の一端である。もう此時は本卸の水面は遙かに此五名の頭の上を越してゐたのである。従つて昇の空氣は強く壓縮され、又各自の呼吸とアセチレン燈のために空氣も悪くなつて來た。そこで呼吸の困難が訴へられたのだ。段々増水して二時間二十五分前には四十四秒目迄の水がもう十五秒迄も迫つた。刻一刻と眼に見へて水の増してくるのを見つゝ、此萬一の頼みを救護隊にかけてゐる時、何か合圖のやうなものを聞いたと云ふ。迷ひもしやう。



此時坑外では、どうして居たであらう。荒川係員以下の昇坑を見なかつたため再三決死隊を出動させたが何分にも迅速な増水で、既に本卸も連卸も坑底から數十米も水没してゐて、何等施す術もない。總水量は實に二百萬立方尺に及んだと云はれてゐる。

ポンプの急設が直ちに手配された。洩れ箇所の手當も行はれた。しかし、此大量の水と後に明かとなつたのであるが、十七ヶ所に渉る大落磐全長百二十五米に及んだため、救護は少しも渉取らなかつた。

午前八時五十分

後四杵トナツタ

僅か二十五分で十一杵も増水してゐる。いさぎよく自爆と云ふことを血氣とは云へない。じりじりと迫りくる危険にあつて、一同を平靜な心境にあらせた荒川係員の筆に現はしてない苦心も思ひ偲ばれるのである。

「呼吸方ハ今ノ處困難デハナイ

救護隊ハドウシテ居ルダラウ

既に多少悪瓦斯のために麻痺したのではなかつたか、呼吸は苦しくないと云ふ。状況は段々悪くなつて行つた筈であるのに。

午前九時五分、増水ハ早イ

ポンプハマダダラウカ

飽く迄もポンプの修理完からず、此増水を見たものと許り考へてゐるのであつた。

午前九時十分

昇詰ニ水カ來タ

吾々ノ命モ後僅カタ

生死ノ事ハ神ノミガ知ル



もう秤の數はない。昇詰迄も水が増して來たのだ。

午前十時前五分

水ハ刻々ニ増シテ行ク然シ十二時迄生キテキレバタスカル様ナ氣ガスル

未ダ死ノ恐怖モナニモナイ

刻々と迫る死の恐怖にも拘らず、尙ポンプが修繕されて、水が眼に見へて減じて行き、救護隊に雀躍として飛びついて行く光景を思ひ浮べてゐたのである。

ポンプガ待チ遠イ氣ガスル部下ノ四名ハ静カダ

午前十時二十五分

刻々増水スル

ポンプハドウシテキルダラウ

午前十一時〇分

ポンプハドウシテキル

呼吸ガ段々困難トナル

午前十一時三十分

ポンプハ運轉シテ居ルダラウカ

ポンプの修理なると共に救ひ出される望を思ひ、ひたすらポンプの修理完成を待つてゐる。

午後〇時七分

水ハ足許迄來タ

後二尺五寸増水スレバ死アルノミ

遂に怖れてゐたものが來た。遂に憎むべき水は勇士達の足許に達したのであつた。しかも、尙ほ刻々と増水しつゝある。此儘二尺五寸増水す



れば。嗚呼、その心境は如何であつたらうか。

**カーバイトも殊り少クナツテ來タ**

かう云ふ時に何よりも慰めて呉れるものは燈火である。もし、燈火が全くなかつたらば一同はどんなに淋しく感じたであらう。しかし、此燈火は一方では炭酸瓦斯を發生し、又アセチレン瓦斯をも發生して空氣を悪くする虞があるのだ。

**モウ救護隊デモ何トカ何リソウダト思フ避難シテ十三時間**

嗚呼十三時間、何と待ち遠しかつたらう。五分十分でも待つ身のつらさと云ふことがある。恐怖の内に十三時間をたゞ救護を待つ。しかし遂に救は來なかつたのだつた。

**午後一時三十五分**

**水ハ増々大キクナル後 尺ポンプハドウシテ居ルタラウカ段々頭ガ痛**

**クナル**

**空氣ガ濁ツテ來タ礦長ト叫ビタクナツテ來ル**

何たる悲惨だ。あの溫容をたへた礦長、日頃親のやうに部下を愛する礦長、必死となつて救護作業を指揮してゐる礦長を思ひ浮べて、「礦長！」と叫びたくなつた。

**午後二時八分**

**刻々ト死ガ近ツテ來ル**

**呼吸困難トナル**

**午後二時三十分**

**午後三時十分**

**午後三時十七分**

もう苦しみのために唯時刻のみを記してゐる。



刻々死が近ツイテ來ル

耳が痛イ鼻毛詰ツテ來ク

午後三時二十五分

惠美子別レガ近ツイテ來タ様ダ

ポンプハドウシタノダラウ

空氣の壓縮は著しくなつて來たのである。茲に荒川係員は始めて私事に觸れてゐる。結婚後一年有餘、琴瑟相和し可愛い、男子を儲けたばかりの妻に、己の死を告げてゐるのである。その胸はどんなであつたらうか。

午後三時三十七分

大分呼吸困難ニナツテ來タ

救護ヲ断念シツ、アル

ポンプハ未ダダラウカ

もう救護されることは諦めたと云ひながらも尙ほポンプの運轉を期待する心狀何にたとへやうもないのである。

午後三時四十分

瓦斯が大分充滿シタ

全カラ盡シ救助サルルナレバ

吾々ハ助カル、煙草喫ミタイ

ポンプの故障ならば、修理完了と共に揚水出來る譯である。全力を盡して救助して呉れば屹度助かるのに一體どうしてゐるのだらうか。無  
いとなれば一層喫みたくなるのは煙草だ。誰もそれを云つてゐる。

藤本主任ポンプ方ハ責任觀念ノ有ルモノヲ使用スル様ニシテ下サイ

午後三時四十五分



午後三時五十分

死力近ツキツ、アル

午後四時

部下ハ最後ノ安逸ヲムサボル

惠美子才前ハ強く生キテ

部下 飯山長二

田島兼松

園田三男

中尾春雄

小生ノカハリニ遺家族ニ對シ

テ御弔辭ヲ願ヒ上ゲマス

荒川光雄

戦場に活躍する部隊長が、自己の妻をして戦死した部下の遺族を弔問させることは屢々聞き、これは夫妻一體の美談としてよく傳へられる處である。しかし、今や自分は部下と共に死せむとする時、妻に強く生きて何卒部下の遺族を弔らへとは何たる嵩高の精神であらう。

君は昭和五年福岡縣宗像中學校を卒業して日鐵に入社し、昭和八年一月徴兵で入隊、成績優秀の故を以て翌九年七月歸休除隊、昭和十三年九月充員召集、同十一月召集解除の經歷を有する天晴在郷軍人である。最愛の妻をして徒らに悼むことなく、強く生きて我部下の遺族を慰めてよと遺言した態度、實に鑛業部隊長の龜鑑であり、在郷軍人の模範である。しかも尙ほ次の文を遺して部隊長としての責任を一身に負ふてゐる。

別記ノ通りナレ共小生ノ

指揮不良ノ爲メ産業戦士



四名ヲ不幸ノドン底ニ落ス様

ニナリマシタ

申シ様モアリマセン

皆様ニ御心配ヲ掛ケツ、

小生等五人ハ死ニマス

部下ノ四人ハ良ク小生ノ命ヲ聞キ

シユウ容トシテ部署ニ就イテ居マシ

タ危険ハセマツテ來マス

部下ノ四人ニ對シテ深く感謝シテ

居マス會社ノ面目ヲツブシテ

申譯モ有リマセン

齋 藤 掛

事業主任  
礦 長 殿  
會 社 所 長

もう説明を附することもない。部隊長としては最善のことを行つてゐたのであつた。しかも遂に部下を救ひ得なかつたのである。部隊長としての責任を痛感して茲に指揮不良のためと一身に責を負ふてゐるのである。此精神こそ坑員精神、軍人精神の華である。

君は資性豪放豁達、職務に當つては熱血精勵恪勤、責任感甚だ強く、上司の命を嚴守し、同僚との和合亦醇厚であつた。曩にコールカッター使用に當つて選まれてその擔當となり、能く部下を訓練し、能率向上増産擴充の基礎を固め、又半島人採炭夫の採用に際しても、その精神的及び技術的薰育統率に妙を得て、實に模範的の係員であつた。従つて前記



の災害に當面しても最後迄希望を棄てず、刻々身に危険の迫まるを感知しながら沈着一絲亂れず統率誘導に當つたことは遺書によつても充分確認されるのである。前途を大に囑望されてゐた優秀な此部隊長を失つた我々は實に痛惜措く能はぬものがあると共に、其の行動に對し賞嘆して止まぬものである。

君は一ヶ年有餘前に妻を迎へ、家庭頗る圓滿で長男雄治君を儲けた。國を思ふの誠心にかでか家を忘るべき。父母に孝であり夫婦相和すこところ皇運扶翼の途である。

君は先づ慈母に遺書を殘し、更に愛妻へ遺書を書いてゐる。そのみならず荒川係員は部下にもそれ／＼遺書を認めさせた。いづれも涙なくして讀まれないものである。

昭和十六年三月十日印刷  
昭和十六年三月十五日發行

發行人

東京市京橋區木挽町八丁目十九番地  
社団法人

日本鑛山協會

振替口座東京七八〇七八番

大庭千代 磨

印刷人

東京市麴町區有樂町二丁目七番地

吉岡清次

印刷所

東京市麴町區有樂町二丁目七番地  
朝陽印刷株式會社



終

